慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小泉先生と唯物史観
Sub Title	Professor Koizumi and historical materialism
Author	小竹, 豊治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.11 (1966. 11) ,p.1305(135)- 1326(156)
JaLC DOI	10.14991/001.19661101-0135
Abstract	
Notes	小泉信三博士追悼特集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661101-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

であって、国民の立場であるかどうかは、問うてみなければわからないことである。利潤の私的帰属は不当であるというかもしれないが、共産党政府が全人民の資本の管理者の名で収得していることを是認するなら、資本の所有と管理が市民の手許へ移るときに、資本所有者の手許へ移らなかったら、かえって不当である。所得の不平等が発生するとおそれるものがあるかもしれないが、不平等そのものは、共産社会にもっと顕著に存在しているのであるし、不平等の何が好ましくないのかは検討さるべき問題であるし、必要ならこれを是正することは共産社会よりも容易に実行されるであろう。

わたくしは、結論としてソ連に市場的営利経済が復活するであろうとか、私有財産制への再検討が起るであろうなどと予言的推測をするものではない。今の政府は夢にもそういうことを考えていそうもないし、中央集権的な経済計画という巨大な現実的権力は共産党の権力の支えとなっている。この経済的権力が今や国民経済の発展にとって一つの障害と感ぜられつつあることはたしかである。党の幹部は経済計画の作成と実施に関する技術的方法の改良を考えている段階である。技術的に能率を高める改良は党として真剣にとりいれなくてはならないにちがいないが、しかし物量的な計画と、計画が市場価格の規制力に優先するという考え方は、今後とも永く支持されるのではないかと思われる。そうだとすれば、コスイギン政府の工業管理機構の改革案もリーベルマンの提案も、その経済的能率向上に十分な刺激剤とはならないであろう。

小泉先生と唯物史観

小竹豊治

はしがき
歴史的変動期の学生時代
海外留学の成果
大いなる先生

はしがき

「人の評価は棺を蔽うて定まる」といわれている。けだし人は生命のある限り、考え、記し、行動して変化するが、死は生命の終止を意味するからである。しかし人の生存期間が死によって確定したとはいっても、その人の全貌を正しく評価することは、言うに易くして、容易になしうるものではない。かりにその人の著作が遺され、接触した人々の記録や談話、交友との書簡があるからといっても、これらはその人を知るための重要な一資料に過ぎない。その他に、公刊されない書簡や

日記類または手記、さらに、その人の研究にとって重要な手掛りとなる公開されない言行に関する事項などがある場合には、一人の人についての研究は、限定されざるを得ない。ましてその人が大いなる人物であり、逝去されてからの時日が短かいために交際し得た者の衝撃の感情が未だ完全に消失せず、入手して読みうる資料も限られているときには、たとえ「棺を蔽うて定まる」とはいっても、その人についての評価は、不十分きわまるものとならざるを得ない。より正しい評価のためには、まず長い時間をかけて、あらゆる資料を入手して吟味する努力を払わねばならない。

いま私は、幽明を異にする恩師・小泉信三先生の著作の一部に関連する本稿を記すに際して、右に述べた感懐をひとしお深くするものである。したがって三田学会雑誌を刊行する慶応義塾経済学会が、門弟の一人であるからといって私に執筆を求めたのは、むしろ非情で時期の熟さない感がある。それにも拘わらず敢えてここに執筆する本稿は、上述の事情のために、限られた資料と時間の制約とをうけた暫定的なものに過ぎない。小泉先生についての一層の研究は、他の多くの人々とともに、今後にまたねばならない。

歴史的変動期の学生時代

小泉先生の唯物史観批判は、先生の多年にわたる社会思想史研究の結論であり、同時にマルクシズム批判の総括をなすものである。しかして先生が社会思想史とマルクシズムに興味をひかれ、またマルクシズムに批判的になられたことに、深く影響をおよぼしたものは何であったであろうか。それは、明治三十八年（一九〇五年）十七歳で慶応義塾大学予科に進み、同四十年（一九〇七年）十九歳で大学部政治科に進み、同四十三年（一九一〇年）二十二歳で慶応義塾を卒業して、直ちに教員に採用され、明治四十五年・大正元年（一九一二年）九月に海外留学のために出発されるまでの約七年間における、堀江帰一、福田徳三の両先生をはじめとする慶応義塾教授陣と当時の日本の政治経済的・社会的情勢であったように思われる。事実、日露戦争後の数年間、すなわち明治末期は、日本の大いなる激動期であった。たとえばすでに戦争前より起っていた初期社会主義運動と労働争議は、戦後には激化したが、明治四十三年五月の幸徳秋水事件によって挫折した。また明治三十八年九月五日の日比谷の日露講和条約反対国民大会の焼打事件への発展は、九月六日から十一月二十九日までの東京地区の戒厳令によって鎮圧されたが、これは戦後処理の容易でないことを示した。さらに南満州と樺太の領有による植民政策は、明治四十二年七月の韓国併合の閣議決定によって一層推進されたが、同年十月二十六日の伊藤博文のハルピン駅頭での暗殺によって、その前途の多難を暗示した。

こういう情勢のうちで、サムライの子としての気力と気概を内包し、国士の如き気風の素質を有し、また強い道徳感・ロヤルティの資質を持ち、すでに少年時代に福沢先生を下手に振り廻すことに反撥を感じた抵抗精神を蔵し、反官僚主義と反形式主義の福沢先生の影響の強い塾風のなかで、「大体明治時代と共に学生々活を終へた」青年・小泉信三が、時代の潮流に関心を払わなかったとしたら不思議だと思われる。[注1] このことは、先生の青年時代の客観的条件が、先生の主体的条件を如何に規定し、またその主体的条件が如何に客観的条件に反応したか、すなわち存在と意識とは影響し合うが、究極的に存在が意識を如何に決定したかの問題である。

小泉先生の上記の特質を刺激して学問への興味、とくに社会思想史の研究へとエンカレッジした人は、周知の如く福田徳三博士であった。先生の一文によれば、「青年の私に、あるひは吾々に、マルクスを吹き込んだのは――外でも書いたが――慶応義塾で経済原論を吾々に教へた福田徳三博士であった。それは今から四十年ほど前の明治四十年の頃で……博士のマルクスに対する情熱は久しくかはらなかった」[注2] のである。また堀江博士については、「自分の興味がだんだん経済理論や社会思想の方向に向ってしまったので、金融財政の方面では、自分ではほとんど何も勉強せず、ただ堀江博士の講義を聴いて覚えただけで、数年後にヨーロッパに出かけたが、英、独、仏諸国の金融市場や財政制度のことは、新聞雑誌の論説を理解す

る程度には一通り知っていた。これは全く博士の講義のお蔭であって、この講義がいかに精密で明快で、且つ up to date であったかを示すものである[注3]」と述べられた。田中萃一郎博士については、「欧州列国政治史とドイツ語とで、ドイツ語ではフリードリヒ・エンゲルスの『家族の起源』とビュッヒャアの『国民経済の発生』とを、教科書として読んだ[注4]」のであり、「剛毅、任侠、宏量という如き、博士の男性的美徳に対しては、私もまたひそかに敬意を懐いていた一人である[注5]」とされ、後年、近世社会思想史を講義するに際して、「社会思想の政治的発現を論ずるところでは、しらずしらず田中博士の講義に学ぶところが多かったと思う[注6]」と述懐された。

さらに小泉先生によれば、「われわれは、大学予科で、気賀勘重氏からフィリッポヴィッチに拠る経済原論を学び、また同氏の翻訳によって、フィリッポヴィッチそれ自身（Eugen Philippovich, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1893）を読んだ。……これは当時のドイツ、オーストリアで最も成功した原論として許されていたものである。……価値論においては、彼れは、多くボエムバヴェルグに拠って限界効用説を説いた。……続いて前記の如く、福田博士によってセリグマンを読んだ。セリグマンの価値及び分配理論は、その同僚にして、同じく限界思想に立脚して新機軸を出し、すべての生産要素は、それが生産収益に寄与しただけを報酬として受けると説いたジョン・ベエッ・クラークに拠るものであった。更に当時の理財科ではマーシャルの原論（Alfred Marshall, Principles of Economics, 1890）を教科書に用い、福田博士はこの講義に基づいて『経済学講義』と題する書を著した。われわれは早速この『講義』とともに原書を読んだ[注7]」のである。だが、これらの「フィリッポヴィッチやセリグマンやマーシャルをどこまで解し得たかということは問題で、正直にいえば、実に怪しいものであったろうと思うが[注8]」、「何れも何等かの形ちで限界効用学説を奉ずる人々で、それを知って吾々は、早くからマルクシズムに対しては批判的であった[注9]」のであり、「マルクス自身は兎もかく、マルクシストの一部の、大袈裟な表情と仰山な言葉遣ひに対しては早くから批判的であった[注10]」とも記されている。

ついで先生は、「なおこの外、当時われわれがドイツ語の教科書として読まされた本も、社会主義を知り、且つそれに対する批判の基礎を与えるものとして適当なものであった。即ちそれはゾムバルトの『社会主義と社会運動』（Werner Sombart, Sozialismus und soziale Bewegung, 1896）とカール・ディールの『社会主義、共産主義及び無政府主義』（Karl Diehl, Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, 1906）である。これは、当時理財科のドイツ語教科書に用いられていたものであるが、一には語学に対する慾から、一には、主題に対する興味から、よく脱け出して行っては傍聴した[注11]」のである。

ところで先生は、ゾムバルトとディールについて次のように記述されている。「当時のゾムバルトは、後のゾムバルトと大違いで、マルクスに多くの同情を持ち『宣言』の熱心な讃美者であった。従ってわれわれも多くの興味をもってマルクスについて学んだ。しかし、究極においては彼れもやはりマルクスに対して批判的であって、マルクスは認識の領域と意欲の領域とを混同するものであるといい、『科学的社会主義』なるものは、一個の自己撞着であり、黄金製の蹄鉄というにも等しいものであるといったのは、マルクシズムに対して誰れもが先ず抱く疑問に答えるものであった。……ディールの方は、……読んでゾムバルトのようには面白くない。しかし、……彼れはよく長きを厭わず原文を引用してくれたから、われわれは重要な社会主義文献の内容を、原文によって一通り知ることができた。そうして彼れもまた社会主義に対して批判的であった。勿論彼れのシュタムラアの『経済と法』に基づく唯物史観批判は、当時学生のわれわれには、まだ難解で、歯が立たなかったが、ごく現実的な立場から、社会主義共同経済の実現困難を指摘した諸箇条は、なるほどそんなものだろうと思われた[注12]」のである。

要するに理解の程度は、未だ浅かったが、先生は慶応義塾教授達の講義によって、欧州の最新の経済学や社会思想史研究の動向を示す教材によって、新しい学問の洗礼をうけられたのである。すなわちフィリッポヴィッチ、セリグマン、マーシャルによって限界思想を、マルクシズムに批判的なゾムバルトやディールによって社会思想の大要とマルクシズムの批判的

論点の若干を会得されたわけである。当時の慶応義塾は、福沢先生とその直弟子による洋学一般の導入・紹介・啓蒙の段階から、外国人講師による経済学の各部門の講義の時期を経て、慶応義塾出身者による専門学者の養成とそれによる講義の新しい時期に入っていた。先生が聴講された教授達のすべては、福田博士のほかは、海外留学を終えて帰朝された塾出身の新進気鋭の人々であった。まさに慶応義塾は、官学に拮抗するのみならず、経済学の先端を切る一大学塾をなしていた。このように小泉先生は、日本における経済学の草創期に学生生活を過ごされたのである。

一方、明治三十三年にドイツの同名の学会にちなんで設立された日本社会政策学会は、先生の在学中の明治四十年以来、年次大会を催していた。先生によれば「この学会会員の社会主義に対する研究は、概して幼稚なもので、社会主義批判論として今日もなお読むべきものは極めて稀れである。……ひとり社会主義批判者の程度が低かったばかりでなく、同時に社会主義者自身の紹介や主張も不正確なものが多かった。当時、幸徳、堺、木下、西川の名は、既に大学生の間に知られ、その著訳も読まれていたが、……マルクシズムの紹介及び註釈になると、程度の低いことが多かった」[注13]状況であった。

このようなとき、小泉先生が慶応義塾を卒業され、明治四十三年五月二十五日、今日もなお真相に疑点があるといわれている幸徳秋水らの無政府主義者による大逆事件が発生し、幸徳ら十二名は翌年一月二十四日に死刑執行された。この事件は全国民に大衝撃を与えた。小泉先生はつぎのように記述されている。

「幸徳伝次郎一派によって企てられたという大逆事件は、強いショックでありました。幸徳は無政府主義を奉ずるものだと伝えられた。無政府主義とはいかなるものか、また虚無主義とはいかなるものか。無政府主義者がそれに訴えるという『実行宣伝』(propagande par le fait)、フランスに起った急進的組合運動者（サンジカリスト）が唱えるという直接行動とはいかなるものか。人びとはそれを問題にし、博学な森鷗外は『三田文学』に載せた『食堂』という小説形式の一文で、その解説と評価を試みたりしました。

人びとはしきりに『危険思想』ということを言った。危険思想が青年にとって魅力のない筈がない。当時、私たちの同僚や同年輩の友人に社会主義者と称すべきものは見当らなかったが、多かれ少なかれ社会主義に対して関心を寄せることは、皆な一様であったといって好いでしょう。幸徳伝次郎、堺利彦の共訳による『共産党宣言』なども、私たちはすでに読んでいました。

堺たちは『宣言』を英訳文から訳したのであり、今考えると理解に不十分の嫌があり、訳語の不適当（殊にブルジョワジーを訳して紳士閥としたこと）な個所もあったのであるが、訳者は二人とも有名な文章家であるし、その力強く引き緊まった文章体は十分青年たちを引きつけるものを持っていました。

けれども、後年或る機会に堺が率直に私に告白した通り、幸徳、堺両人も、久しくマルクスを知っていた訳ではなく、「宣言」の如きも翻訳するときに初めて読んだ位の次第であったということです。一方マルクスに対する批判が、これまた幼稚なもので、当時大学教授側でマルクスをよく読んでいるといわれたのは福田徳三博士が第一で、博士は『資本論』全三巻を読み、自らその索引を作ったと伝えられ（その頃、まだ「資本論」の索引は出来ていなかった）、しばしばマルクスの深遠と難解については語ったが、これに対する批判としては系統的なものは何も発表してなかった。

当時すでにカント派哲学者スタムレルのマルクス批判は、紹介されることはされていたが、よく理解されなかったと思う。ベームの価値論批判、ベルンシタインの修正、ヒルファディングの資本論展開は、何れもすでにヨーロッパでは行われていたが、日本の学界はあまり問題にせず、概して呑気なものであった[注14]」。

先生が二十二歳の青年期に、幸徳事件によって如何に深い衝撃をうけられたかは、七十四歳の五十二年後に書かれた右の迫力ある筆致の一文によっても明白である。「危険思想が青年にとって魅力のない筈がない」というのは、先生自身を含む当時の気概に富んだ青年の動向を表現されたものであろう。現に先生は、幸徳事件の四十三年に塾を卒業後、助手に採用さ

れたが、講義の義務もないので、水上滝太郎等と一緒に文科の教室に出入して、永井荷風のフランス文学や小山内薫のイブセン講読を傍聴したり、芝居を見たりされた。そして「小山内薫の主宰する自由劇場が濠端の有楽座でゴルキイの『夜の宿』（どん底）を上演した頃……この『夜の宿』の舞台稽古も、小山内に許されて、見て興奮したのを憶えている」[注15]と記され、「また、世俗反抗の気概に富んだ荷風の作品が私たちの讃嘆の的であったことも十分の事実です」[注16]と述べられている。これらは、正義感の強い青年達の社会問題への関心の現われであり、またその関心を一層刺激したものであろう。まして大逆事件という大事件が起ったが、社会思想の何たるやが未だ一般に理解されず、ただ『危険思想』という無知な流行語で、当時の社会の矛盾を看過しようとする世俗的傾向に、誠実な智識欲に富んだ青年が、反撥し、もっと根本的に社会思想を探究しようとするのは、当然の心境といわねばならない。したがって時代の潮流に深く心を寄せる者は、共産主義、無政府主義、サンジカリズムの何たるかを、まず系統的に知らねばならなかった。当然、欧州の文献によってこれらを理解し、また如何なる批判的見解があるかも学ばねばならなかった。これは歴史の足音を聴きうる感受性のある誰かによって、なされねばならなかった。それは時代の要求であり、歴史的要請であった。この歴史的必然性を担った者こそが、青年学徒・小泉信三であった。すでに在学中に、外国語の読解力を磨き、福田博士等の教授達によって社会思想やマルクス資本論研究の眼をひらき、最新の限界効用学説を知り、ゾムバルトやディールによるマルクス批判のいくつかの問題点を解する若き小泉先生は、日本の低い研究水準を乗り越えるためにも、研究資料の宝庫の観がある欧州に留学せねばならなかった。それは弁証法的にいうならば、主体的条件と客観的条件との高い段階での統一であった。

（注1）「知性」、昭和二十三年十二月号所載の「師・友・学問」（「今の日本」慶友社、昭和二十五年刊および「現代随想全集6」東京創元社、昭和二十八年刊に所収）。「わが日常」、新潮社、昭和三十八年刊中の「時々所感」の一篇たる「忠（ロヤルティ）」（現代人生論全集3、「小泉信三集」雪華社、昭和四十一年刊に所収）。「座談おぼえ書き」、文芸春秋社、昭和四十一年刊中の「聞見折々」の二篇たる「サムライの道徳」および「明治百年」等を参照。

なお先生の生涯を知るための重要な資料としては、自らの執筆になる左記の伝記的著作があげられる。

(1) 「わが大学生活」、中央公論、春季特大号所載、昭和十三年刊（「大学生活」岩波書店、昭和十四年刊所収。「私の大学生生活」と改題して「小泉信三選集」第二巻、文芸春秋新社、昭和三十二年刊および「現代人生論全集3」の「小泉信三集」、雪華社、昭和四十一年刊に所収）

(2) 「私と社会主義」、「文芸春秋」、昭和二十五年一月―三月号所載（「私とマルクシズム」、文芸春秋社、昭和二十五年刊。「現代随想全集6」の「小泉信三集」、東京創元社、昭和二十八年刊。「昭和文学全集27」の「小泉信三集」、角川書店、昭和二十八年刊。「小泉信三選集」第一巻、文芸春秋新社、昭和三十二年刊。「私とマルクシズム」文庫本、角川書店、昭和三十二年刊にそれぞれ所収）

(3) 「わが住居」、「新文明」、昭和三十一年四月―三十二年二月号所載（「思うこと憶い出すこと」、新潮社、昭和三十一年刊および「わが日常」、新潮社、昭和三十八年刊に所収）

(4) 「私の履歴書」、日本経済新聞、昭和三十七年一月一日―三十一日所載（「私の履歴書」、日本経済新聞社、昭和四十一年刊に所収）

（注2）「私とマルクシズム」、角川文庫版、昭和三十二年刊中の「私と社会主義」、七四―七五頁。「福田博士は、母校の一橋で校長と衝突して逐われたのを、明治三十八年に塾が招聘して始め講師に、次いで教授にしたのである……私が予科から本科へ進むとき理財科（経済学部前身）を棄てて故らに政治科を択んだのは、……政治科ならば福田さんの講義が確実に聞けるからという、やはり上級にいた心酔者のすすめに従ったものである（理財科では福田さんの講義する級と、しない級があった）。その政治科の一年で、博士は当時あらたに出たコロムビヤ大学のセリグマン（Seligman, Principles of Economics, 1905）を使って、たしか純正経済という科目名の下に経済原論を講じていた。……私に学問に対する興味を喚起し、学校教師になりたいという志を起さしめたものは、第一は福田博士であった。」「私の大学生生活」、現代人生論全集3、小泉信三集、昭和四十一年、雪華社刊、一八―二一頁。

（注3）「私の大学生生活」、前掲書、二一―二二頁。

（注4）前掲書、二四頁。

（注5、6）前掲書、二六頁。

（注7）前掲書、三〇―三一頁。

（注8）前掲書、三一頁。

（注9）「師・友・学問」、「今の日本」所収、二八三頁。

（注10）先生は、この文章の表現において、マルクスとマルクシストの一部とを区別されている。昭和二十二年に先生の編纂解題になる福沢諭吉「民情一新」を発行した常松書店主の私の友人たる常松己一君に対して、同書の刊行まもない頃、「私は反マルクスでは

なく、反マルクシストである」と先生は語られた。そして翌年末に発表された前掲の「師・友・学問」において、つぎのように述べられた。「一体、どこでもオウソドックス派といふものが、その本尊の一言一句に、適度以上に重みをつけて、その人に過ちがないものとして取扱つたりして、局外から見ると本然を誤まつて居ることが屢々ある。そのことは現に吾々がマルクシストがマルクスに対する態度を見るとよく判る。マルクスが或る時、少し苦笑の気分で、自分はマルクシストではないといつたことがある。それと同じやうに福沢先生のお弟子が、下手に先生を振り廻すのを見たら、先生は自分は福沢主義者ではない、と言つたかも知れないと思ふ。といふことを考へ、学生に先生の偉大を説くと共に、先生に対して、批判的精神を発揮して、先生を悪くいつてもちつとも差支へないといふことをよく話したものです。……矢張人のことを英雄化し、美化して、言葉を飾るより、有りのまゝに書くといふことが、真実その人を伝へる所以でもあるし、またその人に対して好意を感じさせる所以でもある……」「今の日本」二七六―七、二八三頁。

（注11、12）「私の大学生生活」、前掲書、三二頁。

（注13）「私の大学生生活」、前掲書、二九―三〇頁。

（注14）「私の履歴書」、日本経済新聞社、昭和四十一年刊、四九―五一頁。

「会員（日本社会政策学会会員――筆者註）の中最も学者的で、且つ進歩的だと見られた一人は福田博士であった。当時博士はマルクスの資本論三巻を読破したごく少数の学者の一人ということになっていたが、しかし博士は、頻りにマルクスの深遠なることや難解なることを説いて、学者の興味を刺激することはしたが、マルクシズムに対する実質的な批評というものは、当時においてはまだ一つも発表してなかった。福田博士にして既にこの通りだから、他の一般の状況は察すべきであった。それは当時の欧羅巴、ことにドイツの学界に比し、また近年の日本の学界に比して、甚だしく水準の低いものであった。」「私の大学生生活」、前掲書、二九頁。

（注15）「私の履歴書」、四二頁。

（注16）同書、四三頁。

海外留学の成果

小泉先生の留学は、大正元年（一九一二）九月神戸を立ち、大正五年（一九一六）三月帰国するまでであった。二十四歳から二十八歳の期間である。一九一二年十一月ロンドンに着き、翌年十月までロンドン経済学校（London School of Economics）に学び、同校でキャナン、ボウレエ、フォックスウェル教授等の講義を聴講された。当時はアスキスの自由党内閣がアイルランド党や労働党を与党として社会政策を遂行していた。それにも拘らず、労働階級の不満が起り、アメリカの過激なI・W・W運動やフランスの革命的サンジカリズムが輸入されて労働不安が高まっていた。先生はフェビヤン社会主義者の「マルクシズムに対する批評的態度と、ほとんど理論を持たぬといっても好いほどの現実的な主張に興味を感じ、彼等の智嚢であり、辞書でもあるとされていたウェッブに注意を向け、その著書の多くを読まれた。先生自身は、「恐らくどこにもウェッブの影響を受けてはいない」が、彼において「飽くまでも現実の事実を重んじ、これを精査し、いかなる他人のイズムにも術語にも動かさるることなく、強固な意志をもって着実な自分の歩みを進める社会科学者を見出したのは、一の大きい収穫であった」[注1]とされている。

先生はまた、新聞の報ずる種々の出来事に色々の刺激を受け、ことに英国自由主義の変化を示す諸種の事件が強い刺激になり、様々の思想の影響にもよるが、「イギリスにいる間に、近世社会思想の変遷を尋ね、これに対する批判の態度を定めたいと思い立って、少しずつノートを作り始めた」[注2]のである。こういう批判的な社会思想史の研究にとって欠くべからざるものは、これに関する文献資料の入手である。これについて先生は、つぎのような事実を述べられている。

「ロンドンのネルソンの記念柱の立つトラファルガア・スクエヤー。そのスクエヤーから北の方へオクスフォード街に通ずる街路がチェアリング・クロスロードという古本屋町であるが、その中ほどの東側にヘンダースンという、あまりストックのない書店があった。私は人にきいてこの店をさがしたのか、或は偶然自ら発見したのであったか、もう憶えていないが、これが急進思想書の専門店であったのです。

入って見ると、棚は皆なその種の書籍、殊に小冊子類で一杯でした。『共産党宣言』は無論ある。プルドン、バクーニン、クロポトキン、タッカーという無政府主義者のものはある。更に婦人参政権主張のものがある。自由恋愛主義のものがある。要するに、政府と私有財産制度と一夫一婦婚、その他すべて現行秩序に反抗する一切の主張の文書は皆な集まっている

という次第であった。

そうして、それ等の文書は、明治末、大正初めの日本では、禁断の書であるか、或は遠慮しながら買わなければならぬような出版物であった。禁断は欲望を煽る。私は何か秘密の鉱脈でも発見したような気持ちで、その店へ通った。選択せずに一棚そっくり買うようなことをしたこともある。それをしたところで、平たく並べた小冊子類が主であるから、値段は知れたものである。

これによって私は急に急進文書に対する知識を増した。他面、それに慣れっこになって、驚かなくなったようにも思われる」。(注3)

このことは、先生の社会思想史研究の熱意が如何に強かったかを如実に示している。日本では禁断の書であるが、これを自由に入手し、自由に読める研究の自由を、先生はロンドンの旅舎において、静かにエンジョイされたものと想像される。

約一年間のロンドンでの滞在の後、大正二年（一九一三）の十一月から翌年八月の第一次欧州大戦勃発までの期間、先生はベルリン大学のシュモラー、ワグナーの両大家の講義を聴き、ヘルクナー、ボルトキウィッツ、オッペンハイマーを聴講し、高等商業学校のゾムバルトの講義をも聴かれた。当時オッペンハイマーとゾムバルトは五十歳を迎えたばかりであった。オッペンハイマーの講義内容は、彼の大著「純粋及び政治経済学理論」(Theorie der reinen und politischen Oekonomie, 1910)と大体同じであった由である。ゾムバルトは後年のようなマルクス批判者ではなく、未だマルクスに同情を持っていたようである。

大正三年（一九一四）八月の第一次大戦の勃発前夜における当時の第一党たるドイツ社会民主党の対戦態度は、先生の注目するところであった。先生は同党の開戦反対の演説会に行かれた。同党が遂に開戦賛成に決し、ドイツ社会民主党の崩壊の端を開いた歴史的事件を体験された。先生は後年、「社会党の態度を決せしめたものは何であったか、政府の強圧か、民心の離反を恐れたためか、或いは更にマルクス主義者の胸奥にも、真に階級的利害を忘れて、祖国の危急に起ることを促すものが燃え起ったのであるか。恐らく動機は複雑であったろう。ここに社会科学者にとって最も重要で且つ困難な問題がある筈である。当時、私はこの問題を、もっと深く考えて、或る結論を得て置くべきであったが、実はそこまで考えず、……表面的経過に興味を感じて、再びイギリスに落ち着いた」(注4)と述懐されている。

二度目のイギリス滞在は、一九一四年の秋から翌年の夏までであったが、大半をケムブリッジで送り、ケムブリッジ大学では、ピグウとケインズの講義を聴講された。一九一五年十月以降大陸に渡り、翌年の大正五年（一九一六）三月に帰国された。

先生の留学期間は、第一次大戦直前と開戦期間中の約三ヵ年半だったが、先生は欧州を中心とする世界の激動期の渦中にあったわけである。戦争のために平静な勉学は妨げられたであろうが、日露戦争後の激動期の学生時代と共に、稀有の体験をされたのである。先生は「私と社会主義」において、留学時代を回顧して左のように記述されている。

イギリスにおいて、「十九世紀以来の自由主義の変化、自由主義と社会主義の問題などについて深く考へさせられたのは当然であったと思ふ。もちろん私は留学以前から社会主義の問題には注意を惹かれ、……福田博士による啓発は別としてもゾムバルトやディールの著書、進んではごく少しばかりの原典によってある程度の知識と意見とを持ってゐたが、イギリスの社会的現実が私の上にさらに力強い刺激となったことは争はれない。……手あたり次第に社会主義文書を渉猟(あさ)るとともに、系統的に近世社会主義思想および実践運動の由来経過を明にし、これに対する批評的態度を定めたいとの欲求が漸く強くなってきた。そこで別段それについて学校で講義などするといふあてもなしに、少しづつ近世社会主義に関するノオトを作り始め、ドイツに転学してのちもそれをつづけた。のちに帰朝して慶応義塾で社会問題を担当したとき、差あたり役に立ったのはこの時以来心がけてゐたノオトであった」。(注5)

右のように、小泉先生の留学は、先生の社会思想史研究とマルクシズム研究にとって実りあるものであった。先生の大正

五年四月からの慶応義塾での「社会問題」の講座担任、また後の「社会思想史」講座担任の第一次的準備が完了したのである。その後はこれを深化することが残されただけであった。

唯物弁証法によれば、必然性は偶然性を媒介として貫ぬくといわれる。必然性を認めることは偶然性を否定することではない。したがって学生時代以来からの先生の思想史的発展を顧みれば、日露戦争後の日本資本主義が要請する系統的な社会思想史研究の必然性が、福田博士をはじめとする慶応義塾諸教授の講義と新鮮な教材、卒業の年に起った幸徳事件、イギリスにおける社会政策推進の見聞、第一次大戦の開戦をめぐるドイツ社会民主党の見解対立という偶然性を媒介にして、小泉先生を担い手として貫ぬいていると考えねばならない。しかもこの歴史的必然性の担い手たる先生は、わが国における社会思想史研究の先駆者であると同時に、マルクシズム批判の先駆者であるという矛盾を内包されていたのである。

さらに小泉先生は、社会思想史研究とマルクシズム批判の道を歩まれるに至ったのは、自己の主体的条件を客観的条件に適応させて行われたのである。その客観的条件を自ら任意に作り、気ままに選択して行われたのではない。前記の慶応義塾の講座と教授、幸徳事件、留学、大量の社会思想関係資料の書店での入手などの客観的条件は、先生の意思如何に拘わらず与えられた与件的なものであった。これらにめぐりあったということは、これらの偶然性を媒介とする必然性の現われであったろう。

したがって先生が唯物史観の一半を認めて、「マルクスが『人間はそれ自身の歴史を造るが、しかし人間はそれを自由なる材料から造らず、自ら選択した事情のもとに造らないで、直接目前に与へられた伝来の事情のもとにこれを造る』といったのは、動かし難い真理である。また人間の視野はその環境によって限られるし、また明かに不可能なることは企てないのが常である。この意味に於て、マルクスが言った『人類は常にその解決し得る問題のみを提起する』といふ言葉には多分の妙味が含まれてゐる」[注6]とされる見解は、先生自身の思想的発展にそのままあてはまるのである。

右の引用文にみる如く、先生は唯物史観の一半を承認されている。唯物史観の一部を認めて、他の部分を否定するということは、一つの体系としての唯物史観またはマルクス経済学もしくは唯物弁証法あるいは科学的社会主義理論の破砕を意味するとの厳密な批判もあるはずである。だが独自のマルクシズム批判者としての小泉先生の特色がここに表われていると考えられる。このことはつぎの先生の見解によって、さらに明らかに証明できる。

「著作者評論者としての私の立場についていうと、私は何時かマルクス批判者ということにされたらしい。そうして、それに異存ありません。私はたしかに批判者であった。私は多くの同時代人と共にマルクシズムというものに対して多くの関心をいだき、或る点その影響も受けている。しかし、結局彼れを、誤謬なき（infallible）ただ一人の人と見ることは出来ない。彼れは私にとっては異色ある多くの思想家の中の一人に過ぎない。これがマルクシストと私の違う点であったと思います。経済理論に於ても、国家論に於ても、歴史哲学に於ても、マルクスの主張は全くの謬りではない。否な、非常に多く価値あるものを含んでいることは、幾度もいわなければならぬ。ただ私は彼れの革命家としての局視或は焦燥による多くの誇張と偏説に同意しないというだけである。[注7]」

（注1）「私の学生生活」、「現代人生論全集3」の「小泉信三集」所収、三七―四四頁。
（注2）「私の学生生活」、前掲書、四〇頁。
（注3）「私の履歴書」、日本経済新聞社刊、五二―五三頁。
（注4）「私の学生生活」、前掲書、五五頁。
（注5）「私と社会主義」、「私とマルクシズム」に所収、角川文庫版、七九―八〇頁。先生はまた、カウツキイ校訂の「資本論」民衆版を滞欧中に入手され、カウツキイの緒論、註解およびリャザノフの手に成る索引をつけた同書の内容を、日本で初めて三田学会雑誌に紹介された。このように先生は、「資本論」研究の熱心な開拓者であった。前掲書、八〇―八一頁。
（注6）「マルクス死後五十年」、角川文庫、角川書店、昭和二十六年刊、一二七頁、一六四―一六五頁。「増訂・マルクス死後五十年」、好学社、昭和二十一年刊、一二〇頁。一五七―一五八頁。

（注7）「私の履歴書」、前掲書八二頁。この見解は、昭和三十七年一月の一ヵ月間、日本経済新聞紙上に掲載された先生の晩年の著作中に記されたものである。この文章は、先生が反マルクスではなく、「反マルクシストである」といっておられるように思われる。また、ここに表明された「経済理論に於ても、国家論に於ても、歴史哲学に於ても、マルクスの主張は全くの謬りではない。否な、非常に多く価値あるものを含んでいる……」とされた点は、先生が「マルクシズム研究の、私としては最も熟した成果を収めたもの」（前掲書九三頁）とされた「マルクス死後五十年」という代表的著書中に唯物史観の一半の承認を除いては、詳述されていない。右の見解は、先生のマルクシズム批判の従来の所説の緩和を意味するものなのか、それとも既発表の所見の補足なのか、研究の余地がある。

大いなる先生

大正五年（一九一六）四月から教授として、小泉先生は「社会問題」の講義をはじめられた。この年の一月十二日に大隈首相暗殺未遂事件が起り、また吉野作造の「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」が中央公論一月号に発表され、民本主義の風潮が漸く盛んならんとしていた。ドイツでは一月一日に社会民主党の左派が戦争反対を唱えて分裂し、リープクネヒト、ローザルクセンブルグを中心とするスパルタクス団が結成された。欧州大戦は未だつづき、翌年の大正六年四月六日、アメリカはドイツの無制限潜水艦戦宣言を機会に対独宣戦して参戦した。この年の三月十五日ロシヤのロマノフ王朝が倒れた。このような内外の諸情勢のなかで、帰朝されたばかりの先生の講義は、学生をひきつけたであろう。

先生が講義を担当されたクラス中に、現在の日本共産党の野坂参三氏が本科三年生として学んでいた。野坂氏は小泉先生について左記のように追悼の言葉を記されている。

「ヨーロッパから帰られたばかりの少壮の小泉教授は、わたしのクラスの講義も担当された。そして、おたがいに接触するようになった。ある折、小泉さんがわたしに、「こんど、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』の英訳本を持って帰った。読むか」といって、その本を貸してくれた。これは、日本では手に入れるのがひじょうに困難な書であった。

わたしは、徹夜して全部を書き写し、字引をひきながら夢中で読んだ。当時は、ロシヤ革命を直前にして、世界的に革命の気運が勃興していた時代でもあって、この書がわたしにあたえた影響は、実に大きかった。これによって、わたしがマルキシズムにはいる決意をかためた、といってもいいと思う。

このような手引きをしてくれたのが、その後、反共のチャンピオンとなった小泉さんであったことは、まことに皮肉なめぐりあわせである。」（注1）

これには説明を要しないぐらいに、当時の小泉教授と野坂参三氏との関係が明白である。

大正七年（一九一八）十一月に第一次大戦が終わったが、この年の八月に米価の暴騰がきっかけとなって富山県で起った米騒動は全国に波及した。民本主義または民主主義の風潮が高まるなかに、戦後大ブームの崩壊が大正九年（一九二〇）三月に起った。労働運動や社会主義者の活動も年毎に活発化していった。しかし大正十二年の関東大震災は、大杉栄等の暗殺をはじめとする社会主義運動弾圧の機会を提供した。

小泉先生はこの社会情勢のなかで、論壇に登場されるに至った。この間の事情をつぎのように記述されている。

「私は西洋留学中、社会思想と経済理論の問題に興味を持って、多少のノートを用意していました。それは戦争も革命も起らぬ以前からのことでありましたが、図らずもロシヤ革命が起り、また第一次大戦が終って、茲に戦後の世界にいかなる社会を建設すべきかの問題が起って来た訳です。……人々が争って社会改造について、今まで思想家によって唱えられた様々の提案について知識を求めたのは当然でありました。

『解放』、『改造』その他これに類する名称の雑誌が相次いで企画創刊された当時のことは今も私の記憶に新しい。社会主義、共産主義、無政府主義、虚無主義、サンジカリズム等について、なにがしかの知識を持っているものは、しきりに寄稿を求められることになり、私も期せずしてその一人にされて、留学中に作ったノートが役に立つことになりました。」（注2）

このようなジャーナリズムでの活動のほかに、先生は系統的な社会思想史研究の一環としてロードベルタスからリカードへと、地味な研究を大正九年頃から開始され、昭和四年（一九二九）に「リカアドオ研究」全一巻を公刊された。

現に日本社会党の参議員である木村禧八郎氏は、震災前後の先生の講義から影響をうけた代表的人物である。木村氏は、去る九月「新文明社」から発刊された「小泉信三先生追悼録」において、つぎのように記述されている。

「私は大正八年理財科に入学し、大正十三年経済学部を卒業いたしましたが、小泉先生には本科に進学してから『社会問題』の講座でマルクス、エンゲルス、レーニンなどの社会主義思想の講義をうけました。……先生はもちろん左翼思想に批判的な立場で講義されましたが、批判されるまえにマルクス・エンゲルス、レーニンなりの思想を学問的に冷静に正確に教えて下さいました。……先生の講義が客観的であり、科学的、学問的であったことから、先生の講義の影響をうけて、私のように社会科学に関心をもつようになり、先生の立場とは反対の左翼政党に所属して社会主義の実現に生涯をかけるようになったものと、その反対に資本主義擁護の旗をまもるものとが生れるに至ったことは当然の成行であったと思います。社会主義を批判される小泉先生の講義を通じて、逆に社会主義に情熱を燃やす教え子を生むなどは、弁証法的論理を想わせます。……昭和十四年に私は岩波新書でインフレーションと題する本を出しましたが……出版してから、小林氏（岩波書店の小林勇氏）は私に小泉先生にお伺いいたしたところ木村にインフレーションを書かせてよかろうというお墨付があったのでお願いしたのですと話されました。岩波新書インフレーションは、ですから、小泉先生が生みの親であったわけです」[注3]と。

小泉先生は、戦前に一流のジャーナリストとして活動されていた木村氏が自分と所見を異にしている旨を十分に承知されていた。それにも拘わらず、同氏の著書の刊行を推進するよう小林氏に助言されたのである。これは先生の度量宏大の例証の一つである。そして戦後には、木村氏はすぐれた財政金融通の社会党議員として活動されるに至った。

さらに大正十五年に経済学部を卒業した故野呂栄太郎氏について、同窓の友人田中善次郎氏は、「先生の研究会には属さなかったが……先生を敬慕し、先生も亦よく面倒を見られた……思想的には全く相反して了った野呂栄太郎君が病気で鶴沼に療養していた時も先生は非常に心配され、『何か適当な仕事があったら世話してくれる様』との先生の意を伝へに野呂君を見舞った事がある」[注4]と記されている。このように小泉先生は、野呂栄太郎氏の材幹を愛された。野呂氏が大正十四年頃、先生の「講義の途中で、『先生』と呼び、手を挙げて質問の許しを求めた。許すと、立ち上って、私の批判に服しがたき理由をのべた……社会思想史の外、さらに私はかれの級のドイツ語経済書講読を担当してドイツ語を教へた。この両科目のいづれにおいても、野呂の成績は抜群で、私はかれの答案に全級の最高点を与えたことを覚えてゐる」[注5]と先生は書いておられる。

また岩波書店の小林勇氏は、昭和四年に野呂氏の本を出したいと思い、先生に野呂氏への紹介をお願いすると、「あれはよくできる、立派な人間だといって、すぐ紹介することを承諾された……野呂はそのとき三十歳であった。寝ている野呂は先生の手紙を緊張した顔で読んだ。二時間ほど話したのち、出版を承諾した。『日本資本主義発達史』がそれである。私は小泉先生のお蔭で、この名著を出版することができたのだ……この以前から非合法の活動をしていた野呂は、二年後に地下にもぐった。或る日野呂は……私のところへやってきた。かくれ家を探しているということであった。二人で話しているうちに、小泉先生の名が出た。野呂は望みはないと思うが、久しくお目にかからぬし、この機会を逸しては、ふたたび会えると思わぬから、ともかくいってみようといった。たしかその翌日くらいに、野呂はふたたびやってきた。かくれ家のことは、もちろん断られた、ああいう立場の人に相談するのは、もともと無理なのだといった。」[注6]

後者の件について小泉先生は、「野呂はどうして知ったのか、この茶室に目をつけて、しばらくそこに置いてはくれまいか、といったのである。きいて私は同情したが、それは私に出来ないことなので、その通り言い、野呂はすぐ了承した。それが偶々或る第一木曜日の夕方であった。……私は『こうしている中にも、君も知ってる木曜会の人々が、此処に集まって

来る。こんな人目の多いところに隠れることは、それだけでも不可能だ』とつけ加えていったのを憶えている。なお憶い出したが、その時私は玄関まで送って出て、気がつき『君、金は持ってますか』ときいた。野呂はニッコリして『大丈夫です。御心配なく』といった。その時若し野呂が困っているといったら、私はなにがしかの援助をしたであろう。そうすれば、私は後に喧しくなった共産主義者のシンパというものになった訳である[注7]」と記された。この一文中の「その時」という抑制した先生の表現は、野呂氏に対する哀感とヒューマニティとをひびかせている。

先生がこの野呂氏とのことを回想して書いておられるつぎの文章は、先生の心情の一端を表わすものとして圧巻である。

「考へて見れば、野呂と教室でマルクシズム問答をした日は、既に四半世紀の昔となった。かれが生きてゐれば、吾々の間の思想上の距離はいよいよ相距たるものとなってゐたであらう。あるひは私交もつづけられぬほどになってゐたかも知れぬ。しかし、かれの生前、私はひそかにこの後輩の才幹の非凡を重んじ、その一身を気遣った以外、かれと些かの不快の記憶もない交際に終始したことを幸ひと思ふ。マルクスを批判しながら私は幾人かマルクシストの友達を持ってゐるが、野呂はその中の最も顕著な一人であった[注8]。」

以上のように引用をいとわず、先生の影響をうけた代表的人物として、しかも先生の見解と反対の側に立つ、野坂、木村、野呂氏と先生との関係を述べたのは、先生の多面的な全貌を知るべき必要があると考えたからである。先生は、反マルクシストとして自認もされているが、「福田博士によってマルクスを教へられ、博士とともにマルクスに牽引を感じながら、私の方が師よりもマルクスに対して冷静もしくは無遠慮であったといへるかも知れない[注9]」反マルクシストであった。しかし先生は、「マルクスに対して決して冷淡ではない。過去も現在もそれに充分重きを置き、また多くの点においてかれに学ぶところがあったことを自分で認めてゐるものである。ただ私のマルクシストと違ふところは、マルクスを近世の大なる思想家の中の一人として見ること、またマルクスをインフォリブル（誤りなきもの）と信じないこと、他の思想家に対すると同じくマルクスに対しても、必要の場合に批判的であることである[注10]」という「冷静なマルクスのファン」といえるかもしれない。

まことにかような小泉先生は、マルクスに心をひかれ、またマルクシズムを批判せざるを得なかった。先生はいうまでもなく、何もかも一切をあげて傾倒するマルクス心酔者でもなく、また勿論、反射的生物のようにマルクスに反対する愚かな反マルクシストでもなかった。先生は、自らマルクス学説を批判しながらも、その反批判者（野坂、木村、野呂氏の如き）を生み、しかもその反批判者を包容された大いなる矛盾の人であった。そして先生は、マルクスに対する求心力と遠心力とを内包する矛盾の統一者であった。実に、小泉先生の人間的魅力と大いさは、その反批判者によっても敬慕される一事にある。その所以は、先生の心奥から溢れ出る暖かいヒューマニティにある。

およそ、真個に学問、研究を自己の生命とする者は、自らの所説を継承し、またはこれに追随する後輩の出ずることを好まないであろう。かくの如き人は、自らの研究領域やその深度または高度を乗り越えて、たとい反対の所説を推し進める者であっても、強じんな所信をもち、権威を恐れず、学問的前進のために苦悩する者を愛するであろう。わが師・小泉信三先生はかかる人であった。先生が心から愛する慶応義塾の後輩の教師・塾生らに深く望まれたものは、ここにあったものと確信する。

（注1）文芸春秋、昭和四十一年七月号、二五七―八頁。
（注2）「私の履歴書」、日本経済新聞社刊、七九―八〇頁。
（注3）「小泉山岳の裾野」、木村禧八郎稿、「小泉信三先生追悼録」所収、新文明社、昭和四十一年刊、三五一―三五三頁。
（注4）「小泉先生の教訓」、田中善次郎稿、前掲書所収、二九五頁。野呂栄太郎氏は向井鹿松教授のゼミナールに属した。卒業論文は「日本資本主義発達史」であった。向井先生の談によれば、野呂氏の経済学部助手採用案は同教授によって教授会に提案されたが、決定しなかった、とのことである。
（注5）「私と社会主義」、角川文庫「私とマルクシズム」所収、九一―九二頁。
（注6）「この堂々たる人生」、小林勇稿、文芸春秋、昭和四十一年十一月号、二二三―二二四頁。「野呂は常々慶応で教えを受けた小泉先生のことを敬愛の念をこめて話しているということであった」。同誌、二二三頁。

（注7）「わが日常」中の「わが住居」の項、同書四七二頁。新潮社、昭和三十八年刊。
（注8）「私と社会主義」、前掲書、九三頁。
（注9）「私と社会主義」、前掲書、七五―七六頁。小泉先生によれば、福田博士は「終始マルクスのファン」であった。
（注10）「私と社会主義」、前掲書、七三頁、七五頁。

（後記）㈠ 故野呂栄太郎氏は、大正九年に経済学部に入学している。同氏の卒業前年の大正十四年三月に政府は、普通選挙法と抱き合わせて治安維持法を通過せしめ、長い反動時代の幕を開けている。これは、震災後ますます高まる民主主義の風潮、労働階級の結社と政党の組織化および普選法通過後の政治・思想運動を弾圧するためのものであった。この反動立法は同時に、以前からの右翼分子の結社化と活動とを刺激した。治安維持法の最初の適用は、大正十五年一月十五日の京都大学学連事件であった。塾員の大塚嘉次氏の談によれば、野呂氏はこの事件後に卒業論文を提出した。この事件は東京の諸大学生にも波及したが、野呂氏は三辺金蔵先生と小泉信三先生との断固たる配慮によって、無事に四月に行われた卒業式を終えた。だが卒業式終了後のその日に、右の学連事件で検挙された、とのことである。思うに小泉先生は、合理的考察を旨とする経済学者であると同時に、合理的考え方の相違を乗り越えるヒューマニストの風格をもつ思想家であった。

㈡ 小泉先生のマルクシズム批判を評して大内兵衛先生は「……この批判は……上等の品格ある批判だと思う」（文芸春秋、昭和四十一年七月号、二五八頁）とされ、また向坂逸郎氏は「……小泉さんのマルクスの理論に対する批評の多くは、批判として最高のものである……小泉さんのマルクス批判は、私の前にある学問の道をけわしくした。私は、小泉さんのマルクス批判の装備がよかっただけに、私は私なりに、装備をよくすることをつとめたのであった。私は今日でも若い人々に、小泉さんのマルクス批判を読んで、これに完全に答えられるようになれ、とすすめる……」（文芸春秋、昭和四十一年一月号、二八七―八頁）と記されている。このように、上等または最高の批判とか、装備のよい批判とかいわれる所以は、小泉先生がマルクスの諸著作を熱心に研究し、マルクス価値論批判のためには、さらにロードベルタスやリカードその他を研究し、唯物史観批判のためには、さらにクーノー・フィッシャーの著書を手引きとしてヘーゲル哲学を研究し、また新カント派に属する人々の多くの著作を読破して、自己の見解を形成された事実によるものであろう。本稿では先生の唯物史観批判にはふれなかった。だが結局において、先生の批判の提起する主要な論点は、(1)形式論理学と弁証法論理学の適用性の問題、(2)弁証法的歴史的必然論における因果性と目的性の一致の問題であると思われる。先生は、(1)については、弁証法論理学を重視しないで形式論理学的思考法則に立脚し、(2)については、機械的必然論の見地から論評し、弁証法的な因果性と目的性の一致に反対して、カントの実践理性的なものの肯定に接近されている。

小泉信三博士年譜および著作目録

年	年譜	三田学会雑誌掲載論文・著作目録	社会経済年表
1888年（明治21年）	東京市芝区三田に生まれる。父信吉は旧紀州徳川藩士、江戸に出て福沢諭吉の塾に学び、開成学校（後の東京帝国大学）教授、横浜正金銀行副頭取、大蔵省奏任御用掛を歴任、明治二〇年慶応義塾長となる。		枢密院を置く、議長伊藤博文〇黒田内閣成立〇森鷗外ドイツ留学より帰朝。 （仏）ブーランジェ事件。 中江兆民「国会論」、植木枝盛「国会組織国民大会議」、吉本襄「高島炭坑坑夫虐遇の実況」、福沢諭吉「日本男子論」「実業論」
1889年（明治22年）			大日本帝国憲法等公布〇森有礼暗殺〇東海道本線開通〇地租代米納廃止。 （英）ロンドン港ドック労働者スト、大勝利。 〇パリで第二インター結成。 大井憲太郎「自由略論」、伊藤博文「帝国憲法義解」。
1890年（明治23年）	父信吉慶応義塾長を辞し間もなく日本銀行に入る。牛込筑土八幡に移転。		第一回衆議院総選挙〇帝国議会開院〇立憲自由党・国民自由党結成〇教育勅語発布。 〇世界恐慌。 （独）社会主義労働党総選挙に躍進。 〇ベルリンで国際労働会議開催。 （仏）北フランスにゼネスト。 （露）ナロードニキ運動拡がる。 （英）マーシャル「経済原論」。
（明治24年）	父が日本銀行から派遣されて横浜正金銀行支配人となり、横		大津事件〇第一次松方内閣成立。 （独）社会民主党大会『エルフルト綱領』を採択。